
優良物件

中等遊民

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

優良物件

【NZコード】

N94050

【作者名】

中等遊民

【あらすじ】

親戚の法事の為、東北地方のとあるローカル電車に乗った「私」は車内で住宅情報誌を抱えた不可思議な女の子と出会う。その、旅先でのたつた一度の彼女との短い邂逅が「私」の人生と日常に「えた、平凡且つ多大な影響とは……。

眠りからさめると、車窓は山の斜面を覆う晩夏の木々で覆われていた。四両仕立てのローカル列車はゆっくりと山を登つてゆく。車内にはガタンゴトンと電車特有の心地よい走行音が規則的に響くだけで、私以外この車両に人のいる気配はない。もう少し走れば小麦色の無数の稻穂に覆われた平野部へ出るはずだ。

会つた事もない母方の遠い親戚が亡くなつたとの報を受け、たまたまその時に体調を崩してしまつた母に替わり、私が葬儀へ出る事になつた。

行つたことも無い東北の街を目指し、新幹線を降りたまでは良かつたのだが……。出掛けに母が心配したとおり、何本目かのローカル線乗換え駅で私は見事に反対方向へと向かう車両に飛び乗つてしまつた。間違いに気付いた私は焦つてすぐに次の駅で降りたものの、ローカル線特有の連絡の悪さの為、一時間半を無人駅で過ごした後、ようやくこの鈍行列車に乗る事ができた。

ちょっと安心したのか、しばらくグーグー寝ていたらしい。私は固くなつた体をほぐそうと大きく体を伸ばしながらあくびをした。

あーあー……ふうー

「あーあー、あ、ふう……」

私のあくびに効果音をつけるように妙な人真似をする声が聞こえ、私はギョッとした。いつのまにか通路を挟んだ向かいの対面座席でニコニコと笑いながら、私のするように両腕を天井へ向けて伸ばし、大口を開ける真似をしている女の子がいた。歳は六、七歳くらいであろうか、白いシャツに紺のサスペンダースカート、頭にはちょっとサイズの大きい麦藁帽子をのせている。

「おじさん、いびきかいてたよ」

その女の子は屈託無く笑いながら私にそう言った。

アハハ、はずかしいね、と私は苦笑いした。それにしても、この

子はいつからここに座っていたのだろう？ 保護者や兄弟が一緒にいる様子も無く、女の子は一人でそこに座っていた。女の子の膝は何やら厚手の雑誌がのつかっている。

「ところでお嬢さん、今日はお一人でお出かけですか？」

私が聞くとお嬢さんは「クリと頷いた。子供の相手があまり得意ではない私は、ちょっと困ったなと思いながらも、こんな小さい子が一人でこんな寂しい山間の路線を使うのか、とちょっと感心した。一体このお嬢さんはどこまで行くのだろう？」

「そうか、お嬢さんはどこまで行くの？」

「決めてないよ、おじさんについていこうかなあ」

それは困ったなあと私は笑つて見せた。ただ、先程から「おじさん」と呼ばれているのでけつと苦笑いしてしまつ。私は一応まだ二十代だった……。

「そんな事言つてると、お嬢さんみたいな美人はアブナイおじさんに連れてかれちゃよ」

ふざけてそう言い返してみたが、実際、最近は洒落にならないのでは少し女の子のことが心配になつた。

いつしか列車は山頂を越え、下り坂へと差し掛かっていた。

「ところでお嬢さんのお家はこの辺にあるの？」

私が聞くとお嬢さんは少し顔を曇らせて首を振つた。

「前は住んでたけど、わたしのお家無くなっちゃつた」

「それはかわいそうに……。でもすぐに新しいお家にも慣れるよ」

私がそう慰め言葉を掛けると、お嬢さんは膝に乗せた分厚い雑誌をめくり始めた。

「わたし、引越しはじめてなんだ。早く新しいお家見つけないと」

お嬢さんはそう言いながら食い入るように雑誌を読んでいる。

よく見るとそれはこの地域の住宅情報フリー・ペーパーだった。JRの時刻表を暗記する小学生は以前テレビで見た事があつたが、住宅情報誌を熱心に読む子供なんて初めてだ。幼い子供が不動産探しなんて奇妙な話だが、お嬢さんは何やら真剣な表情でページをめく

つて いる。

私は敢えてそれ以上聞くのを止めたが、今度は逆にお嬢さんの方が私に質問してきた。

「ねえおじさん、おじさんは引越しした事ある?」

「あるよ、何回も。お嬢さんくらいの頃に四回くらいはしたかな。引越ししてすぐの時は前住んでた家が恋しいなあって思つたけど、いつのまにかその家に慣れていったね。その繰り返しだったかなあ……」

私は子供の頃の記憶に引き出した。私の幼い頃は引越しの連続だった。お嬢さんは幼いながらも私の話を真剣な顔で聞いていた。

「わたし、生まれてからずっとその家に住んでたから……」

「そうか、それは確かに寂しいし、前の家が恋しいよね」
しばらく、電車の列車の走る音だけが車内に響き渡つた。

列車は峠の中ほどまで下つてきたようだ。

床に届かない脚をブラブラさせながら、しばらくまんやりと車窓から外を眺めていたお嬢さんは急に思い立つたように体を伸ばして私の方を向いた。

「おじさんの家つてどこにあるの?」

「僕の家は遠くだよ、東京にあるんだ。東京へは行ったことがある?」

お嬢さんはニヤニヤ笑いながら首を横に振つた。

「トーキョーのお家は木でできてるの? わたしのお家は全部木でできてるんだあ」

「へえ、木造家屋かあ……。僕の家は鉄筋コンクリートだからなあ」

「じゃあさあ、じゃあさあ、おじさんちには神棚ある? 神棚

神棚? 私は今まで神棚のあるような古風な家には住んだ事が無かつた。

「うーん残念……。神棚も無いなあ。ずいぶん伝統的なお家が好きなんだね」

そう言つと、お嬢さんは頷きながら照れくさそうに笑つた。

私はポケットに好物のミルクキャラメルが入つていた事を思い出

し、ポケットから黄色い紙箱を引っ張り出した。

「お嬢さんはキャラメルはお好き？ もし良かつたらねーつひつひ

お嬢さんはわーありがとうと言ひて、キャラメルを一粒とつた。

「キャラメルの味は変わってないね。何十年ぶりだろ？」「

お嬢さんの冗談に私は笑つた。確かにそのミルクキャラメルは明治時代からある老舗のお菓子会社が昔に作つていたキャラメルの復刻版製品だつたからだ。

お嬢さんはキャラメルをなめながら、なんだかとても楽しそうな顔で私を見ている。どうしたの？と聞いてみるとお嬢さんは脚をばたつかせながら言つた。

「わたし決めた。今度、トーキョーへ行くよ。おじさんが神棚のある木のお家作つたら、遊びに行くよ」

「そう？ それは嬉しいなあ。でも僕が家を建てるのはいつになるだろ？ なあ……」

私はまだ安アパート暮らしど、自分の持ち家なんて夢のまた夢だった。

「大丈夫だよ。わたし必ず行くからね。約束しようよ」

「ははは、じゃあ約束しよう。指きりげんま、嘘ついたら針千本の一まず、指切つた」

こんな風にして人と約束したのは何年ぶりだろ？ 小指を絡ませながら、ほとんど忘れかけていた指切りのおまじない文句が口をついて出た事に我ながら驚いた。

そうしていのうちに、列車は山を下りきつて、森を抜けた。すると一面西田に照らされた黄金色の稲で埋め尽くされた平野が車窓の景色いっぱいに広がつていた。

「きれいな眺めだねー、お米ももう刈入れ時だね」

私は窓の景色を見ながらそう言い、車内に振り返つてみて狼狽した。向かい側の席にはお嬢さんの姿は無く、キャラメルの包み紙一つと古ぼけた住宅情報誌のみを座席に残して煙のよつて消えてしまつていた。

私は不思議に思つて車内を見回すが、誰もいない。私は慌てて両隣の車両も見て回るがお嬢さんの姿はどこにもかつた。

私が困惑している間に列車は私の目的駅に着いてしまい、私は狐につままれたような気分で駅へと降り立つた。

取り残されたような寂しさと、お嬢さんの身を案じる心配と、白昼夢でもみていたかのような現実感と非現実感が心の中に同時に湧き上がってきた。発車してゆく車両の窓越しにもお嬢さんの姿を見つける事はできず、私は釈然としない気持ちのままその駅を後にした。

翌日、なんとか無事に葬儀に出席し、挨拶を終え、その日の夕方には東京へ戻る為の帰路についた。

私は土産を買うために寄つたとある小さな町の日抜き通りにあるベンチに座り、駅へ向かう路線バスを待つていた。

元々古い旧家屋が立ち並ぶ通りだつたようだが、少しづつ現代風の新しい家や商店が建ち始めていた。特にこのバス停の真向かいにある大きな空き地には新しくコンビニエンスストアができるようで、看板の付いた柵で囲まれた更地が広がっている。

そこへ、かなり年配のおじいさんがゆっくりとした足取りで、人気の無い通りを歩いてきた。そのおじいさんは目の前の更地を見ると、少し驚いた様子で口を開け、残念そうな顔をして首を振つた。

「あーあ、とうとう壊しちやつて……。可哀相にな……」

おじいさんは空き地に向かつてそう咳きながら、ポケットからなにやら小粒大のサイロ口のような紙包みを取り出し、空き地の前へと軽く放り投げた。

もしかして認知……。

おじいさんを見ながらそつ考へていたところで、おじいさんが急に私の方へ顔をむけたので、それまで無意識に好奇の視線を向けていた私は慌てて明後の方へと視線を逸らした。

「おたく、この空き地に、前何だつたかご存知ですか?」

おじいさんが不意に私に話しかけたので、私は首を振つて旅行者だと答えた。

おじいさんはくたびれたのか、難儀そうに私の横に腰を下ろした。
「ここは大昔からの旧家で、立派な家がついこの前まで建つてたんですけど、いまではこの有様で」

私は、はあと相槌を打つ。

「実はその屋敷には小さな子供が住んでいて。といつても、その家の者は誰もその子の事を知らないんだが、自分は一度だけ会つた事があるんです。もう六十年以上前に、まだ十歳になつたばかりの頃、お袋からもうつた駄菓でキャラメルを買つてた帰り道にこの家の前で」

おじいさんはズボンのポケットからキャラメルの紙包みを一つ取り出した。

「一つくれと言うから投げてやつたら二口一口笑つて喜んでたなあ。小さな女の子で、でつかい麦藁帽子をかぶつてた」

私は無言で頷いた。ふと昨日会つたあのお嬢さん思い出した。

「その女の子がこの家に住む座敷童子だつて判つたのはその後で、この家にはそんな歳の娘はいなつていうんだから、不思議なものですね。その後、あの子と会う事はなかつたが、自分が大人になつても、いつもやつて偶にこの家の前でキャラメルを放り投げてやると、ちょっと田を外している内にそのキャラメルがなくなつているんですよ。そうするとこっちもなんだか嬉しくつてね……」

私は目を丸くしてその話を聞いていた。

普段なら、そんな馬鹿な話があるわけないと呆れるとこりだが、今日ばかりは何故かそんな気持ちにはならなかつた。

「さすがに棲家を壊されちゃ、こんな所にいるわけないなあ……。今はどこでどうしているのやら……」

老人はそう言つと、アスファルトの路面に転がつてそのままのキャラメルの包みを拾い、ゆっくりとした足取りで歩き出した。

「新しい家、見つけるんじゃないですか？」

私はおじいさんの背中にそう声をかけた。

おじいさんが少し驚いた顔で振り返った。

「きっと、今ごろ新しい引越し先を探しますよ」

口から出任せと言わればそれまでだが、私は何故かおじいさんにそう言いたかつた。

「ははは、自分もそう信じる事にしましょ」

おじいさんは振り返つてそう笑つと、ゆっくりと歩つていつた。

東京へ戻り、私はただ漫然とした労働が続くネズミ色の日常へと戻つていつた。

それから数年、私の日常は相変わらずだつた。

敢えて報告するべき事といえば、何の因果か普段買わない宝くじをたまたま買ったそのクジが当たり、その賞金で都内にこじんまりとした木造の一軒家を構えたこと。

そして、母の強い勧めで見合いをし、言われるままに結婚。子供が一人できたが、その妻には三年足らずで逃げられたことぐらいだらう。

それ以外に私の人生にこれといったイベントは起きていない。

「ただいまー」

玄関から板の間をドコドコと走る足音が聞こえてきた。

「お父さん、お昼まだー」

白いシャツに紺色のスカートをはいた娘の御藻^{ミズク}が赤いラングセルを背負つたまま居間へやってきた。

「おかえりー。ミズクさん、先にやることあるでしょ？」

私は洗面所の方を指しながらミズクに言った。私は昼食の為にこしらえたスペゲツティ・ナポリタンをフライパンからお皿へとよい、テーブルへと持つていつた。

またドコドコドコと駆け足がして、うがいと手洗いを終えた娘が居間へと飛び込んできた。

「じゃあ席について、はい、頂きます」

ミズクとテーブルに向かい合って座り、スパゲッティを食べ始めた。

「美味しいかい？」

「味うすーい、でもまあまあだからこれでいいや」

そう言つて娘はスパゲッティを食りつづける。がつづいて食べるものだから口のまわりやほつぺたがソースのせいでオレンジ色になつてゐる。

「そんな慌てて食べなくてもまだ沢山あるよ」

私はそう言つて紙ナフキンで娘の頬についたソースのケチャップを拭つてやつた。

私と娘はもう六年間、こうして平凡に暮らしている。ただ、事あるたびに何やらデジヤブのような不思議な視界や感覚が脳裏で騒ぐことがあつた。今ミズクの頬を拭いた時も私は何やら以前の記憶が騒ぐような感覚を感じていた。決まって思い出すのは数年前東北で出合つたキャラメル好きの女の子の顔だ。

私は肩越しに背後の天井を振り返つた。背後には、洋風の居間にはなんとも不似合いな白木づくりの大きな神棚が設けられている。私はふたたびスパゲッティと格闘しているミズクを見た。やはりよく似てゐる……。

「ねえねえ、おじいちゃんとおばあちゃんにはいつ行くの？」

不意に娘にそう尋ねられ、私はカレンダーへと目をやる。

「そうか、もう夏休みだもんな……。じゃあ来週行こうか？」

「やつたあー、おばあちゃん料理上手だからなあ。今度は何作つてくれるかなー」

娘がてきて一番喜んでいたのは、私ではなく他ならぬ私の両親だつた。幸いな事に娘も両親にはよくなついている。特に母とは仲がいい。

私はオレンジ色に染まつたスパゲッティの麺を手繰りながら再びこの数年間を思い返してみた。

私は急に顔をしかめ頭を抱えた。どうしても急に思い出せない事柄があることに気付いたからだ。

それまで宝くじを買う習慣がなかった私は、あの当たりクジを一
体どこの売り場で買ったのだろう?
家が建つた時のことははっきりと覚えている。その時に両親と大

喜びした記憶もある。

その後、結婚して……。あれ? 見合いをして結婚したような気がするが、なぜか私に三行半を突きつけて出て行った元妻の顔が思い出せない。

そもそも、顔どころか人として「こんな奴だった」という個性自体がまるで霧に包まれたかのようにボンヤリしてしまって、どうしても思い出せなかつた。

私はミズクを見つめた。何を思ったのかミズクもフォークを握る手を止めて不思議そうな顔で私を見ている。私も瞬きしながら娘を見つめる。私は再び、背後の神棚を見上げた。

……? やはり、憑かれたか?

私はため息をついた。まあ、それはそれで、いいじゃないか……。私は少し笑いながらスペゲッティを搔き込み始めた。

「お父さん、なに急に笑つてるの?」

「いや、何でもない……。思い出し笑い」

私は笑いながら娘に答える。

「ねーねー、ご馳走様したら、キャラメル食べていい?」

ミズクがテーブルの端に置かれた黄色いミルクキャラメルの小箱を指さして聞いた。

「三時になるまでダメー」

私はそう言つて、フォークを回してソースに染まつた皿の上のスペゲッティを絡げた。

(おしまい)

（後書き）

最後までお読みいただき、ありがとうございました。
多分に独り善がりな作品に仕上がってしまったこと、反省しております。

多分に誤解を招きやうなので一つだけ弁明させていただくなれば、
この作は「やせしに彼女とかきれいな奥さんとかいう、そんな都市
伝説や幻みたいなものはもういらないし、どうでもいいが、せめて
愛情をそそげる自分の子供だけはいてもいいかな」という喪男の妄
想的願望が形になつただけです。

だから断じてこの物語を「ロリコン趣味」的に解釈してはいけませ
ん。（ 説得力ないかもしませんが……）

ただ、娘の名前だけは自分でも「どうにかならなかつたのか?」と
思います。色んな意味で……。

岡本 綺堂の一つファンの乱心として御容赦いただければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9405o/>

優良物件

2011年7月31日23時17分発行